

中学生の進路成熟に関する縦断的研究

愛知教育大学 職業指導教室 坂 柳 恒 夫

A Longitudinal Study of Career Maturity in Junior High School Students.

Tsuneo SAKAYANAGI

Department of Career Guidance

問題と目的

進路指導(career guidance)における重要概念の1つとして、「進路成熟」という用語がある。進路成熟とは、Crites(1973)によって使用された“career maturity”の訳語で、キャリア成熟ともいわれている。Super(1984)は、「進路成熟とは、進路発達課題へ取り組もうとする個人の態度的・認知的レディネスである」と定義している。また、King(1989)は、「進路成熟とは、知見の広い、年齢にふさわしい進路決定をするための個人のレディネスである」と定義し、それを進路行動(career behavior)の重要な側面であると指摘している。要するに、進路成熟とは、簡潔に言えば、「進路の選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢である」といえる。

この進路成熟概念の基本的特徴について、坂柳(1991)は、進路発達(career development)概念と関連させながら、次の5つに整理している。

①進路成熟と進路発達の両概念は、職業や職業的な連鎖・パターンの枠に制限されていない、幅広い内容を含むものである。現状では、進路成熟と進路発達は、相互関連概念として、並列的に使用されることが多い。

②進路成熟の概念は、進路発達の概念と比べ、

人間としての望ましい(よりよい)方向への志向性、あるいは理想の状態(目標)に向かっての進歩的変化、という教育的価値が重視されている。従って、進路成熟には、望ましい(よりよい)進路発達の意味が内包されている。

③進路成熟は、個人の進路発達の状態(程度・水準)を示すだけでなく、これも含め、さらに成熟していく過程も含む、有用性のある概念である。

④進路成熟の概念は、「進路選択・意思決定や、その後の適応への個人のレディネス」を測定・評価する目的で使用されることが多い。

⑤進路成熟の概念は、職業的発達、職業的成熟、進路発達の諸概念を包括している。

進路成熟の概念やモデルが実践的意義を持つためには、まず進路成熟が確実に測定できなければならない。そのために、従来の進路成熟に関する研究の主要な焦点は、進路の選択・意思決定に必要な諸要件を、個人がどの程度獲得しているかを測定することにあつたといえる。これまでに、進路成熟を測定・診断する検査類が、青少年用から成人用まで、数多く開発されている。青少年を対象とした代表的な測定用具には、Crites(1973)の「進路成熟目録(Career Maturity Inventory)、Super et al.(1981)の「進路発達目録(Career

Development Inventory)」、Westbrook & Parry-Hill(1973)の認知的職業成熟検査(Cognitive Vocational Maturity Test)、Gribbons & Lohnes(1975)の「進路計画のためのレディネス(Readiness for Career Planning)」、中西ら(1982)の「進路発達調査」などがある(Herr & Cramer, 1988; Betz, 1988; 坂柳, 1991を参照)。

ところで、進路成熟の測定における基本的かつ重要な問題は、「進路(キャリア)」の意味内容をどのように理解するかということである。というのは、進路の意味内容の理解の仕方によって、進路成熟の測定そのものの展開が大きく影響されてくるからである。最近の進路(キャリア)の概念をみると、個人の時間的な経過(過程)の強調だけでなく、視野範囲(スコープ)においても、「職業(職業的キャリア)」という視点から「人生・生涯(個性的な生き方)」という視点にまで拡大されて、より包括的なものになっている(Gysbers, 1975; Super, 1980, 1986; Herr & Cramer, 1988)。既存の進路成熟の測定用具の大部分は、グローバルな単一の進路(キャリア)概念によって、進路成熟の程度・水準を測定しようと企画されている。しかし、グローバルな単一の進路概念の場合には、その効用と同時に、意味内容が多義的であり、曖昧であるといった問題点がみられる(坂柳, 1981)。特に、わが国の中学校の進路指導の現状や生徒の実態などを考慮した場合には、主要な進路の内容として、「教育進路」、「職業進路」、「人生進路」の3つを視野範囲に入れ、明確化しておくことが必要であると考えられる(坂柳, 1988)。

わが国においては、青年期の進路成熟に関する横断的研究はいくつかあるものの、縦断的研究は極めて少ない。横断的方法によって得られた結果と、縦断的方法によって得られた結果とは必ずしも同じでないことが指摘されている(Vondracek et al. 1986)。進路成熟の形成過程を明らかにするためには、縦断的方法を導入していくことが要請される。そこで、本研究では、中学生の進路成熟の諸相を「教育(進学)」、「職業(選職)」、「人生(生き方)」の3つの側面に区分し、その一般的特徴や構造的な変化などについて、縦断的データをもとに検討していくことにしたい。

研究の方法

1. 調査の対象・時期

本研究において使用したデータは、愛知県T市内の公立中学校で、全校生徒を対象にして各クラス単位で、1988年12月、1989年6月、1989年12月、1990年12月の3年間に渡って実施された「進路発達に関する縦断調査」の一部である。本研究では、3学年間における進路成熟の縦断的推移を検討するために、1988年の第1回調査で1年生であった生徒を分析の対象とした。具体的には、この縦断調査のデータから、1989年6月(第2回調査)を除き、3年間に渡って調査対象として確定できた、男子生徒106名、女子生徒87名について分析を行う。

2. 進路成熟の測定尺度

進路成熟の測定にあたっては、進路概念の多義性や広がりなどに留意しながら、①教育進路成熟(主に、進学先の選択・決定への取り組み姿勢)、②職業進路成熟(主に、職業選択への取り組み姿勢)、③人生進路成熟(主に、人生や生き方への取り組み姿勢)の3側面(系列)の進路成熟を設定した(坂柳, 1988, 1990, 1991)。

3側面の進路成熟を測定する尺度項目は、これまでの進路成熟の測定に関する研究(竹内・坂柳, 1982; 竹内・坂柳, 1983; 坂柳・竹内, 1985; 坂柳・竹内, 1986, 中西・竹内・那須, 1982)を参考にして、関心性(concern)、自律性(autonomy)、計画性(planning)の3領域から、それぞれ合計15項目が作成された。〈表1〉に、進路成熟の測定尺度(項目)を示した。これらの尺度は、各項目とも「5:あてはまる」、「4:ややあてはまる」、「3:どちらともいえない」、「2:ややあてはまらない」、「1:あてはまらない」という5段階評定法を用い、5点から1点までの得点が与えられ、各側面の進路成熟(下位尺度)の合計得点が算出されるようになっている。従って、各下位尺度の得点範囲は、15~75点に分布し、中間点は45点となっている。この得点が高いほど、当該側面の進路成熟度が高いことを意味している。

<表 1> 進路成熟の測定尺度 (項目)

教育進路成熟(Educational Career Maturity : ECM)	
1.	進学のための勉強は、自分から進んでしている。
2.	どんな種類の学校や学科があるのか、気にしている。
3.	将来どんな学校に進学するのか、見通しを立てている。
4.	志望校に進学するための計画を立てて、準備をしている。
5.	志望校の校風や特徴などは、自分で調べている。
6.	どんな上級学校を選ぶかを、自分で考えている。
7.	進学や進学先のことについて考えている。
8.	進学の目標を立てて、それに向かって努力している。
9.	進学のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
10.	進学先は、自分の意思で決めている。
11.	何のために進学するのかを考えている。
12.	志望校に進学するための道筋が、わかっている。
13.	進学先について、いろいろと比較し検討している。
14.	進学先は、自分で責任をもって決めている。
15.	自分を生かせる上級学校について、調べている。
職業進路成熟(Occupational Career Maturity : OCM)	
1.	将来の職業の準備は、自分から進んでしている。
2.	どんな種類の職業や産業があるのか、気にしている。
3.	将来どんな職業につくのか、見通しを立てている。
4.	将来、職業につくための計画を立て、準備している。
5.	職業の内容や就職方法などは、自分で調べている。
6.	どんな職業を選ぶかを、自分で考えている。
7.	将来の職業や就職先のことについて考えている。
8.	職業につくための目標を立て、それに向かって努力している。
9.	職業を選ぶことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
10.	将来の職業については、自分の意思で決めている。
11.	何のために就職するのかを考えている。
12.	希望する職業につくための道筋が、わかっている。
13.	将来の職業や就職先について、いろいろと比較し検討している。
14.	将来の職業や就職先は、自分で責任をもって決めている。
15.	自分を生かせる職業について、調べている。
人生進路成熟(Life Career Maturity : LCM)	
1.	これからの人生を豊かにするために努力している。
2.	これからの人生のことを考えて、自分なりの人生設計を立てている。
3.	これからの人生のことについて考えている。
4.	これからの人生では、自分の意思と責任で生き方を決めていきたい。
5.	いろいろな生き方を比べたりして、自分の生き方を探している。
6.	どんな人生や生き方があるのか、関心がある。
7.	これからの自分の人生は、自分の力で切り開いていく。
8.	これからの人生について自分なりの目標をもっている。
9.	人生の意味について考えている。
10.	自分で責任をもってこれからの人生を送っていく。
11.	これからの人生について、見通しを立てている。
12.	どんな生き方をしたらよいのか、自分で考えている。
13.	人生のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。
14.	これからの人生での出来事を自分なりに予想できる。
15.	自分にふさわしい生き方を、いろいろと考えている。

3. 分析方法

まず、中学生の進路成熟の縦断的推移の様相をみる分析である。3つの時点（調査時期）ごとに、進路成熟（3つの下位尺度）の合計得点とその標準偏差を求めた。また、3側面の進路成熟について、繰り返しのある場合の平均得点に差（学年差）があるかどうかを検討するために、繰り返し測定での分散分析を行った。

次は、3つの時点での進路成熟の構造的な変化をみるための分析である。最初に、進路成熟の下位尺度間のPearsonの相関係数を算出した。そして、中学生の進路成熟の因子構造をみるため、その相関行列をもとに、因子分析（主成分解、Varimax法、Promax法による回転）を行った。

結 果

1. 進路成熟態度尺度の内的整合性

最初に、構成された進路成熟態度尺度の内的整合性（等質性）を、調査時期（学年）ごとに検討する。〈表2〉は、進路成熟の下位尺度の内的整合性の指標として、Cronbachの α 係数を示したものである。

〈表2〉 進路成熟の各尺度の α 係数

		中1時点 (1988年)	中2時点 (1989年)	中3時点 (1990年)
男子	教育進路成熟尺度	.835	.887	.823
	職業進路成熟尺度	.876	.914	.886
	人生進路成熟尺度	.910	.930	.927
女子	教育進路成熟尺度	.774	.861	.877
	職業進路成熟尺度	.827	.891	.900
	人生進路成熟尺度	.904	.936	.948

これをみると、1年時点における女子の教育進路成熟度が、.774とやや低いものの、他の尺度の α 係数はすべて.800以上であり、十分に満足のできる水準にある。また、各尺度得点と尺度に含まれる項目との相関も高く、そして項目間相関においても、全体的には正の有意に高い相関係数が得られた。

以上の結果から、進路成熟を測定する3つの下位尺度は、内的整合性の点で一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度であるといえる。

2. 進路成熟の縦断的推移

ここでは、中学生の進路成熟の様相を、教育の側面・職業の側面・人生の側面の3つに区分して、各平均得点の縦断的推移を中心にみていくことにする。各調査時期（学年）ごとの3側面の進路成熟の平均得点・標準偏差および繰り返し測定での分散分析結果は、〈表3〉に示したとおりである。また、〈図2〉は、同表を視覚化したものである。

3年間を通しての繰り返し測定での分散分析の結果、男女ともに、教育進路成熟、職業進路成熟、人生進路成熟、いずれの側面の進路成熟得点にも学年差が認められた。そこで、この学年差について、2年間ごとに分離した分散分析結果から、平均得点の傾向を整理してみることにする。

(1) 教育進路成熟の推移

男子では、学年の進行とともに得点が直線的に上昇しており、進学へのレディネスを中心とした教育進路成熟の進歩的な変化がみられる。

女子の場合には、1年から2年にかけて緩やかな上昇的傾向をみせているが、2年から3年にかけては加速的な上昇（進歩的变化）を示している。

(2) 職業進路成熟の推移

男子の場合、1年から2年にかけては平均得点が高くなっているが、2年から3年にかけては顕著な有意差が認められていない。すなわち、2年以降からは、停滞ないし横ばいの傾向を示している。

女子の場合には、学年進行とともに得点が直線的ではあるが、比較的緩やかな上昇傾向（進歩的变化）を示している。

(3) 人生進路成熟の推移

男子では、他の2つの進路成熟と同様、1年から2年にかけて平均得点が高くなっている。また、2年から3年にかけては統計的有意差は示されなかったが、緩やかな上昇傾向がうかがわれる。

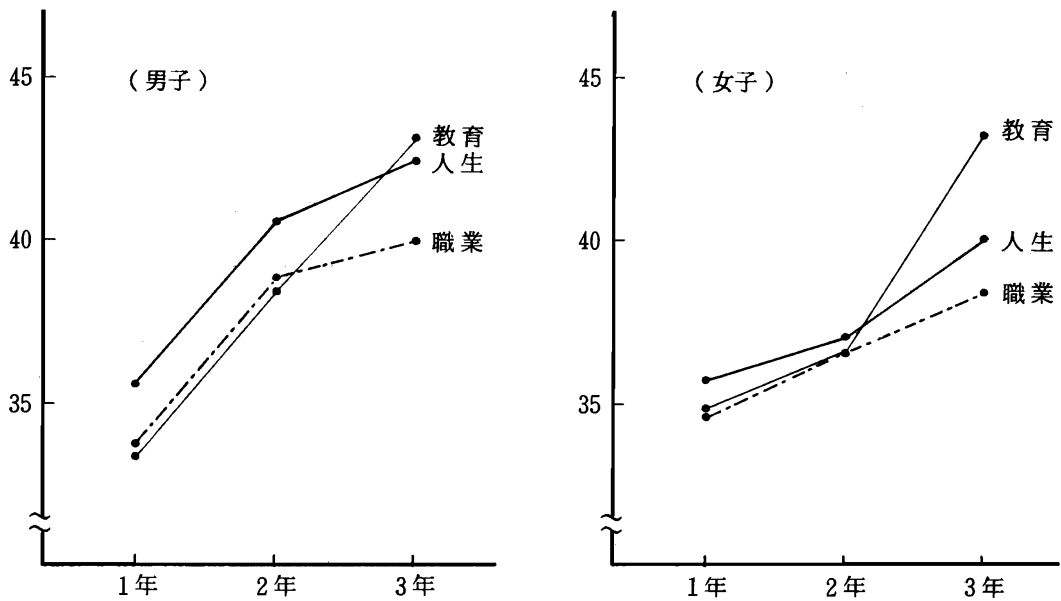
女子の場合には、男子と異なり、1年から2年にかけては統計的な有意差が示されなかったものの、2年から3年にかけては平均得点には有意に高くなっている。すなわち、2年以降から、人生側面での成熟に深まりが認められる。

なお、各進路成熟に関して、性差が認められたのは、2年時点の人生進路成熟のみで、女子よりも男子の得点のほうが高い($t=2.05, p<.05$)。

<表3> 3学年間の進路成熟の平均得点・標準偏差および分散分析結果

		1年時点	2年時点	3年時点	繰り返し測定の分散分析		
		平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	time 1-2-3	time 1-2	time 2-3
男 子	教育進路成熟	33.56 (9.67)	38.44 (9.94)	43.14 (8.81)	49.95 ***	26.30 ***	23.77 ***
	職業進路成熟	33.85 (10.90)	38.83 (10.83)	40.04 (10.73)	16.03 ***	16.88 ***	1.33
	人生進路成熟	35.68 (12.33)	40.53 (11.66)	42.54 (12.13)	19.89 ***	17.67 ***	3.83 △
女 子	教育進路成熟	34.78 (7.85)	36.69 (8.42)	43.23 (8.48)	44.08 ***	3.89 △	69.94 ***
	職業進路成熟	34.64 (8.80)	36.69 (9.31)	38.38 (10.08)	6.79 **	3.61 △	3.70 △
	人生進路成熟	35.83 (10.86)	37.08 (11.44)	40.13 (11.80)	6.94 **	0.97	10.61 **

(注) 分散分析結果欄の数値は、F値である。0.1%水準には***を、1%水準には**を、10%水準には△を付している。timeに付随する数値は学年を示している。



<図1> 各進路成熟得点の縦断的推移

3. 進路成熟の側面間相関

同一の調査対象者について、3回の調査を実施したので、進路成熟の諸側面（下位尺度）における時点間相関と、各調査時点（学年）における進路成熟の下位尺度間の相関が得られた。従って、進路成熟の構造的な変化について、この2つの視点からみていくことにする。

(1) 進路成熟の時点間相関

進路成熟の諸側面について、3年間の時点間相関係数を、<表4>に示した。

<表4> 各進路成熟における時点間相関

		1-2年	2-3年	1-3年
男子	教育進路成熟	.500	.445	.431
	職業進路成熟	.340	.502	.336
	人生進路成熟	.511	.605	.517
女子	教育進路成熟	.387	.627	.268
	職業進路成熟	.386	.646	.441
	人生進路成熟	.437	.719	.413

教育進路成熟についてみると、男子の場合には1-2年の時点間よりも、2-3年の時点間の相関係数の方が、やや低くなっている。これに対して、女子では、1-2年の時点間と比べると、2-3年の時点間の相関係数の値がかなり高くなっている。このことから、女子の教育進路成熟は学年の進行につれて、次第に安定した状態に移行しているといえる。

職業側面と人生側面の進路成熟については、男女共通して、1-2年の時点間と比べ、2-3年の時点間の相関の方がかなり高くなっている。すなわち、学年の進行につれて、職業・人生の両側面の進路成熟は、比較的安定した状態へと移行している。また、その安定化の程度は、男子よりも女子の方が高い。

(2) 進路成熟の側面間相関

各学年（調査時期）における進路成熟の諸側面間の相関係数は、<表5>に示したとおりである。

いずれの調査時期（学年）においても、全般的にみて進路成熟の諸側面間には、男女とも有意な高い相関が認められる。注目されることは、男子の場合には学年が進むにつれて、教育側面の進路

<表5> 各時点における進路成熟の側面間相関

		1年	2年	3年
男子	教育—職業	.805	.760	.657
	職業—人生	.699	.863	.723
	人生—教育	.699	.646	.595
女子	教育—職業	.662	.723	.668
	職業—人生	.586	.798	.753
	人生—教育	.590	.748	.696

成熟は、職業側面、人生側面の進路成熟との相関係数が徐々に低下していることである。女子では、2年以降から、このような低下傾向がみられる。この結果は、学年が進むにつれて、進学レディネスを中心とした教育進路成熟が次第に分化し、明確化していくことをうかがわせるものであると推察される。

4. 進路成熟の因子構造

中学生の進路成熟がどのような因子構造をもっているかを調べるために、各調査時期（学年）における3つの下位尺度、総計9尺度について、男女別に因子分析を行った。その方法として、下位尺度のPearson相関係数をもとに、Scree Testによって因子数を決定し、主成分分解を求めた。そして、より単純構造を得るために、Varimax回転し、さらにPromax回転を行った。最終的には、斜交3主成分分解を得た。<表6>は、男子の準拠構造値と因子間相関を示したものである。また、<表7>は、女子のそれを示したものである。

<表6> 進路成熟のPromax回転後の準拠構造および因子間相関（男子）

	因子	I	II	III
1年	教育進路成熟	.811	.053	-.048
	職業進路成熟	.841	-.051	.009
	人生進路成熟	.617	.095	.148
2年	教育進路成熟	.185	.664	-.076
	職業進路成熟	-.024	.784	.014
	人生進路成熟	-.055	.703	-.130
3年	教育進路成熟	.184	-.083	.653
	職業進路成熟	-.038	.049	.735
	人生進路成熟	-.049	.090	.702
因子間相関	I	1.000		
	II	.432	1.000	
	III	.414	.531	1.000

〈表7〉 進路成熟のPromax 回転後の準拠構造および因子間相関（女子）

因子		I	II	III
1年	教育進路成熟	.855	-.075	-.017
	職業進路成熟	.709	-.067	.232
	人生進路成熟	.709	-.219	-.139
2年	教育進路成熟	.107	.587	-.090
	職業進路成熟	-.061	.622	-.000
	人生進路成熟	-.005	.747	.130
3年	教育進路成熟	.008	.144	.580
	職業進路成熟	-.014	-.015	.749
	人生進路成熟	.018	.253	.523
因子間相関	I	1.000		
	II	.383	1.000	
	III	.364	.595	1.000

結果をみると、男女とも共通して、各学年（時点）内部で、教育・職業・人生の各進路成熟の側面が融合化した、総合的な進路成熟因子が示されている。男女ともに、第I因子は「1年生の総合的進路成熟因子」、第II因子は「2年生の総合的進路成熟因子」、第III因子は「3年生の総合的進路成熟因子」と命名した。

次に、この因子間の相関をみると、男女ともに、「総合的進路成熟因子」においては、1-2年の相関よりも、2-3年の相関の方が高くなっていることがわかる。これは、教育・職業・人生の各進路成熟の側面が一体となった総合的進路成熟においても、学年の進行につれて、徐々に安定した状態へと移行してきていることを示唆するものである。

全体の考察とまとめ

1. 中学生の進路成熟の縦断的推移について

本研究では、中学生の進路成熟の様相を、教育の側面、職業の側面、人生の側面、の3つに区分して、縦断的に分析した。まず、中学生の進路成熟の一般的特徴について考察する。発達的にみると、進学へのレディネスを中心とした教育側面の進路成熟は男女共通して、学年の進行に応じて高まりを示している。とりわけ、女子の2年生以降からの教育進路成熟の急激な進歩的变化は注目される。

これに対して、職業側面および人生側面の進路

成熟は、男子の場合には1年生から2年生にかけて顕著な進歩的变化がみられるものの、それ以降は比較的緩やかな上昇ないし停滞的な傾向がみられる。女子の場合には、学年の進行とともに、緩やかなペースで両側面の成熟が進行しているといえる。

以上の諸結果を総合化して考察されることは、卒業学年の段階では、現実的には「将来の職業」であるとか「これからの人生や生き方」といった、いわゆるストレートに「進学（特に、高校受験）」に結びつかない進路問題は先延ばしして、前向きに取り組むことを回避するような傾向がうかがわれることである。「将来の職業」や「人生・生き方」を積極的に自分に問いかける以前に、目の前にある卒業時の「進学問題」の方が大きな関心事になっていると推察される。一方では、中学校の進路指導が、特に卒業学年においては、「職業や生き方」から離れた「進学（受験対策）中心」の指導に重点が置かれがちな現状を示唆しているといえよう。進学指導においても、単に、学業成績や学力偏差値による「合格の可能性」だけでなく、進学を希望する生徒の個性、職業希望や人生設計に応じ、適切な選択が行われるように指導し、生徒が明確な目的意識を持って進学できるように努めることが必要である。

2. 進路成熟の各側面の相関関係について

次に、中学生の進路成熟の各側面の相関関係を考察する。各下位尺度の1年間での時点間相関をみると、2-3年の相関と比較して、1-2年の相関は、男子で.340～.551、女子で.386～.437、となっていた。これは再検査信頼性における安定性の概念から考えると、予想したよりも低いものであり、下位尺度の内部相関よりも低い値となっている。この結果は、中学生という時期における進路成熟の揺れ動きの激しさを示唆しているといえる。

各時点（学年）における進路成熟間の相関は、全体的にはかなり高いものであった。しかし、教育側面の進路成熟は、2年生以降から他の2つの進路成熟を徐々に引き離し、分化していく傾向もみられた。この結果は、各進路成熟の平均得点の

推移の状況からも理解できる。

3. 進路成熟の因子構造について

因子分析の結果では、男女とも、各学年（時点）内部で、教育・職業・人生の各側面が一体となった、総合的な進路成熟因子が示された。このように、調査時点（学年）に特有の因子がみられたことは全般的にみると、進路成熟の諸側面がまだ独立していない状態にあることを示している。

また、各学年における総合的進路成熟の因子間相関では、1-2年と比べると、2-3年の相関の方がやや高くなっており、不安定な状態から安定した状態へと徐々に移行している様子がうかがえる。

4. まとめと今後の検討課題について

本研究では、中学生（男子106名、女子87名）を対象にして、教育・職業・人生の3側面における進路成熟の様相を縦断的データをもとに分析した。その結果、一般的な特徴として、進学へのレディネスを中心とする教育進路成熟の進行状況と比べると、人生・職業の両側面における進路成熟の進行状況は、2年生以降から遅滞傾向がみられることなどを明らかにできた。

今後は、中学生の進路成熟の形成過程に対して、どのような要因が、どのような形で影響を及ぼしているのか、すなわち、進路成熟の規定要因の分析を進めていくことが必要である（清水・坂柳, 1988）。また、中学生の進路成熟の形成過程は、現実的には、個人的変数と状況的変数が複雑に絡み合い影響していると予想される。従って、進路成熟と個々の要因との関連を検討するだけでなく、複数の要因を同時に取り上げて、その促進力・抑制力を総合的かつ相対的に検討していくような、進路成熟への相対的規定力の分析が要請されよう。さらに、高校生段階での進路成熟に関する縦断的データの分析が必要である。

謝 辞

本研究で使用したデータは、関西大学教授清水和秋氏との共同研究の一部である。このようにその一部を単独で発表することに快諾し、ご協力とご助言をいただきました同氏に深く感謝致します。また、データ収集に多大なご協力をいただきました中学校の諸先生方、生徒の皆さんに厚くお礼申し上げます。

1991年12月25日受理

引用・参考文献

- Betz, N.E. 1988 The assesment of career development and maturity. in Walsh, W.B.& Osipow, S.H. (eds.) *Career decision making*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Crites, J.O. 1973 *Theory & Research Handbook for the Career Maturity Inventory*. McGraw - hill.
- Gysbers, N. C. & Moore, E.J. 1975 Beyond Career Development. *Personel and Guidance J.* 53, 647-652.
- Herr, E.L. & Cramer, S.H. 1988 *Career guidance and counseling through the life span: Systematic approaches*. (3rd ed.) Boston: Scott, Foresman.
- King, S. 1989 Sex Differences in a Causal Model of Career Maturity. *J. of Counseling & Development*, 68, 208-215.
- 中西信男・竹内登規夫・那須光章 1982 進路発達調査の手引 実務教育出版
- 坂柳恒夫 1981 進路成熟の測定・評価と活用 中西信男・広井甫（編）進路指導の心理と技術 福村出版。
- 坂柳恒夫 1988 揺れ動く進路——進路観の発達 教育相談研究, 51, 22-25.
- 坂柳恒夫 1990 進路指導におけるキャリア発達の理論 愛知教育大学研究報告第39輯, 141-155.
- 坂柳恒夫 1991 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告第15号,

269-280.

坂柳恒夫・竹内登規夫 1985 進路成熟態度尺度 (CMAS-3)の作成と項目分析 愛知教育大学 研究報告第34輯,213-230.

坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度 (CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告第35輯,169-182.

清水和秋・坂柳恒夫 1988 進路不決断と進路成熟——父親、母親、友人、教師の影響に関する高校生の横断的な研究 進路指導研究,9,28-36.

Super, D.E. 1980 A life-span, life-space, approach to career development. *J. of Vocational Behavior*,13,182-198.

Super, D.E. 1984 Career & life development. in Brown, D. & Brooks, L. (eds.) *Career Choice & Development*. Jossey - Bass.

Super, D.E. 1986 life-career roles: self-realization in work and leisure. in Hall, D.T. (ed.) *Career development in organizations*. Jossey - Bass.

竹内登規夫・坂柳恒夫・1982 進路成熟態度尺度 (CMAS-1)の作成と項目分析 愛知教育大学 研究報告第31輯,193-210.

竹内登規夫・坂柳恒夫・1983 進路成熟態度尺度 (CMAS-2)の作成と項目分析 愛知教育大学 研究報告第32輯,193-208.

Vondracek, F. W., Lerner, R.M. & Schulenberg, J.E. 1986 *Career Development: a life-span development approach*. Hillsdale, N. J. :Erlbaum.